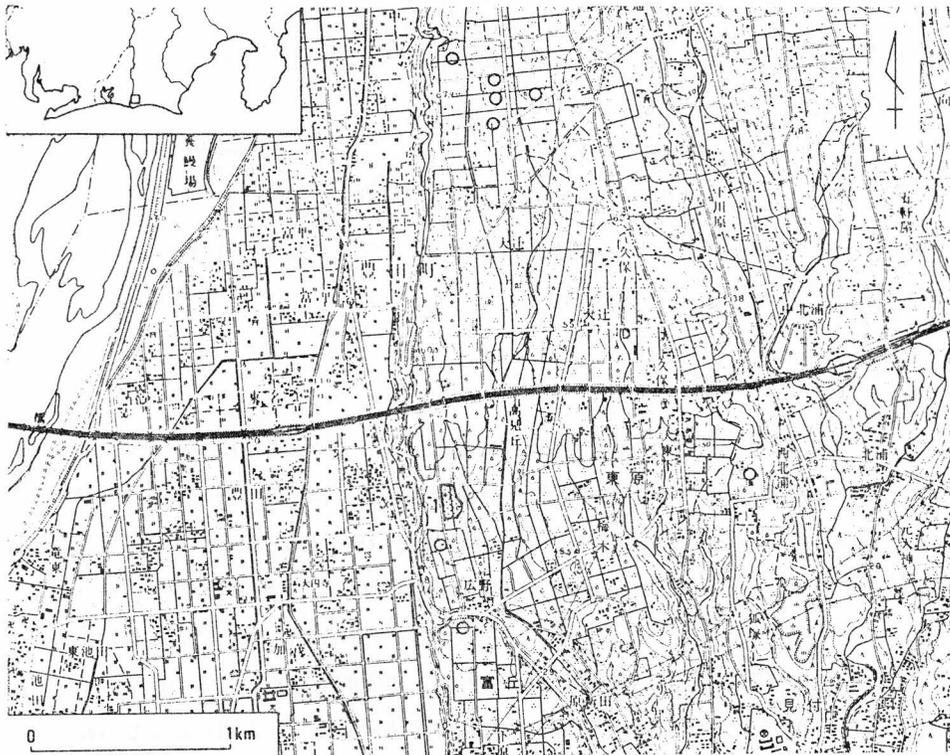


静岡県広野北遺跡第2b層に属する敲石類 の分布状況について

黒坪 一樹

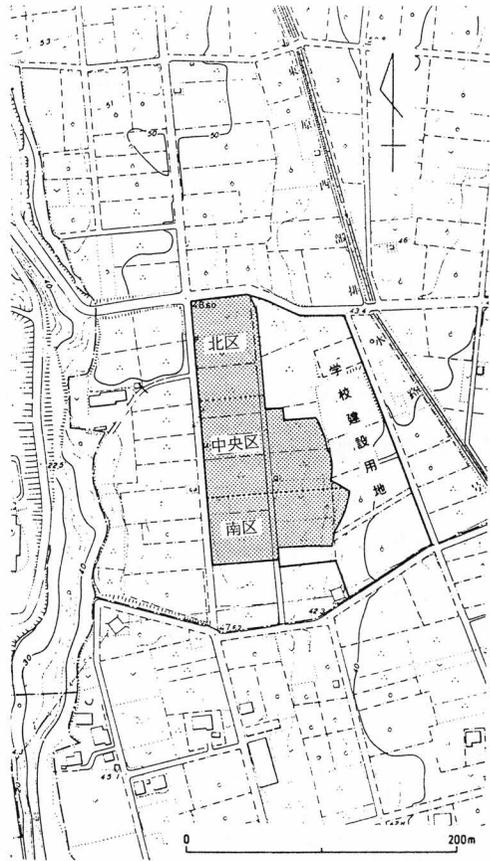
1. はじめに

本遺跡は静岡県磐田郡豊田町大字高見丘に所在する。天竜川の東岸には、河岸段丘としての磐田原台地が広がり、寺谷遺跡・池端前遺跡・京見塚遺跡をはじめ60カ所以上のものぼる先土器時代遺跡が密集している。広野北遺跡は東に開析谷を望む台地西南部に位置している(第1図)。調査面積はおよそ13,000m²と広く、先土器時代集落のほぼ全体を掘り切ったものと言える。11に分けられた自然堆積層中、第2b層および第3層において先土器時代の遺構・遺物が検出された。第2b層の内容は時期的に大きく三つに分かれ、細石刃文化



第1図 広野北遺跡(1)と周辺の先土器時代の遺跡(○印)

段階、尖頭器文化段階、ナイフ形石器文化段階のものとなっている。第3層はナイフ形石器を指標とする文化段階である。なお、本遺跡の正式報告書はすでに刊行されて、各文化層の内容が詳細に記述されている。^(注1) 北区・中央区・南区と三分されている調査区のうち、中央区(第5図)については、集落構成・景観の復原を念頭にさまざまな分析がなされた。この作業の一環として、特に敲石類の分布状況について観察をすすめてきた訳であるが、報文に石器ブロック内・外の分布状況だけではなく、礫群・配石との位置関係などについても観察を試みるつもりであった。しかしながら、現在に至っても当該作業を完了していない。したがって、今回は第2b層中におけるナイフ形石器文化段階の石器ブロックを例にとり、これと敲石類の分布状況を観察するといった中間発表的なものとした。敲石類の分布論の意義を高めるに有効な、礫群や配石さらに台石などの遺構・遺物との関係については、今回は分析の対象から除外している。



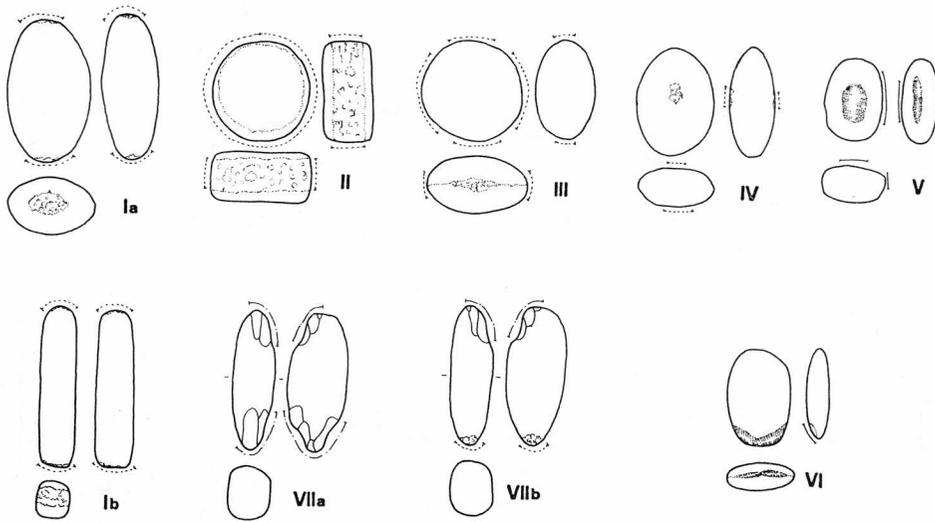
第2図 発掘区および周辺の地形

は、今回は分析の対象から除外している。

2. 敲石類の分布状況

それでは敲石類がブロックのどのような位置に存在しているのか検討していく。敲石類をめぐる分布状況については、富山県野沢遺跡の報文中で詳細な分析を試みた。^(注2) 第3図に示される如く、敲石類は敲石(Ia, II~V類)と槌石(Ib, VIIa, VIIb類)さらに局部磨製礫(VI類)を包括する。そして敲石は植物質食糧の調理用具、槌石は石器製作具という用途を推定し、両者のブロックにおける分布位置を調べた。その結果、敲石は石器群の密集域から外れた位置に存在する傾向が如実に捉えられた。対照的に槌石は、確かにブロック外縁部にも多く分布するが、石器群密集域に非常に多く位置することを明らかにし得た。

こうした分布傾向が果して本遺跡についても表われるのかどうか、具体的に検証してお

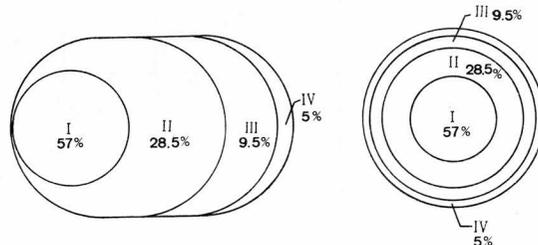


第3図 敲石類形態区分概念図

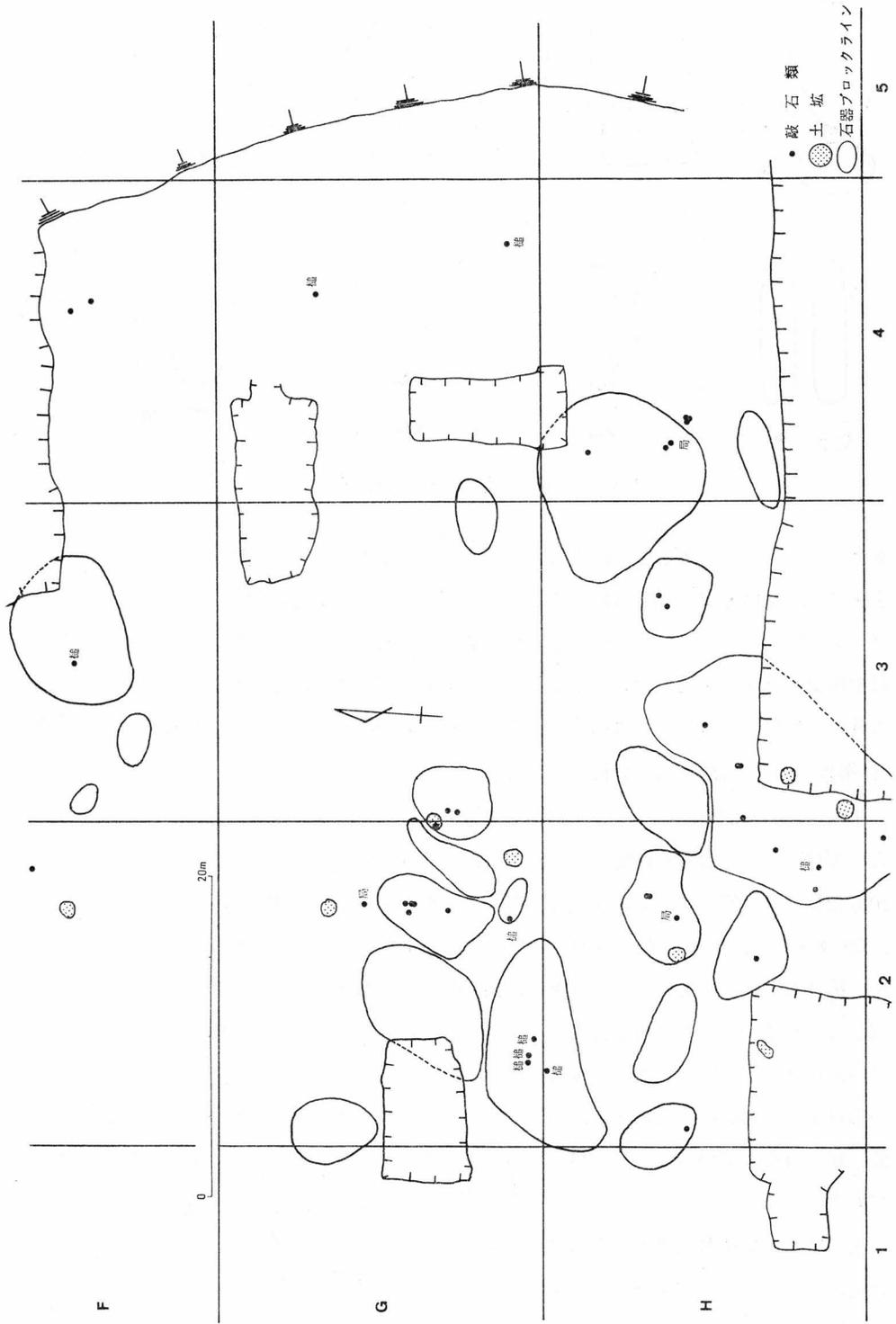
きたい。そのために敲石類を出土している石器ブロックを、野沢遺跡で試みたのと同様の手法でゾーン区分する(第4図)。そして敲石類が高い割合で分布するゾーンとそうでないゾーンをまず明らかにする。次に敲石類を敲石と槌石さらに局部磨製礫に分けて、それぞれの所属ゾーンの相違について観察したい。なお、報文中で設定されたとのブロックからも外れ、散漫分布域にいわば単独で分布している敲石類がある。これらの資料はブロック外(第IVゾーン)と解釈して分析をすすめた。

中央区には計20カ所のブロックがあり、これらのうち11ブロックから敲石類の出土がみられる(第5図)。敲石類の総数は41点を数える。各ゾーンに占める割合は、第Iゾーンに10点(24.4%)、第IIゾーンに3点(7.3%)、第IIIゾーンに17点(41.5%)、第IVゾーンに11点(26.8%)となる(第6図)。ブロック内の石器密集域から完全に外れたゾーンと言える第IV・第IIIの両ゾーンを併せた占有率は、実に68.3%にも達する。多くの敲石類は石器密集域から外れて分布していると言える。石器総数に対するゾーン別占有率は最も配分の少ない第IVゾーン(5%)と次いで少ない第IIIゾーン(9.5%)に、7割近い敲石類が分布していることに注目しておきたい。

次に敲石・局部磨製礫・槌石に分けて、各ゾーンの分布割合を観察する(第7図)。



第4図 ブロックのゾーン区分概念図(注3参照)



第5図 中央区第2b層に属する敲石類分布図

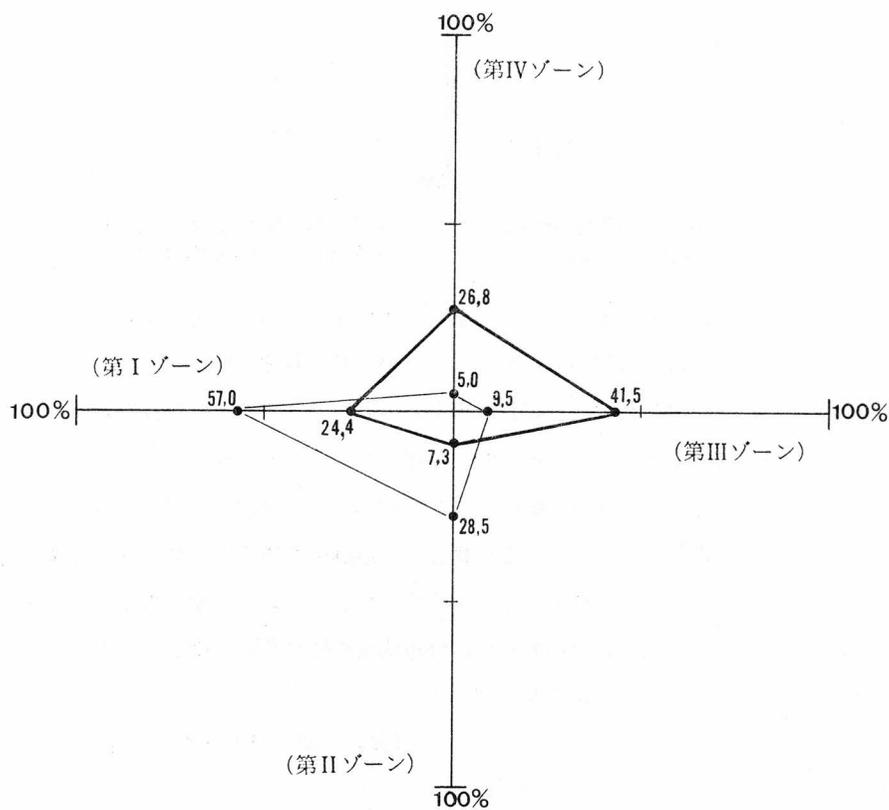
敲石は合計29点である。各ゾーンごとの占有率は、第IVゾーン8点(27.6%)、第IIIゾーン13点(44.9%)、第IIゾーン3点(10.3%)、第Iゾーン5点(17.2%)の内訳を示す。第IVと第IIIゾーンに全体の72.5%が集中する。第II・第Iゾーンに占める割合は3割にも満たない状況である。

局部磨製礫は3点のみの出土である。第IV・第III・第Iの各ゾーンから1点ずつ分布している。資料点数の制約から分布傾向については言及し得ない。

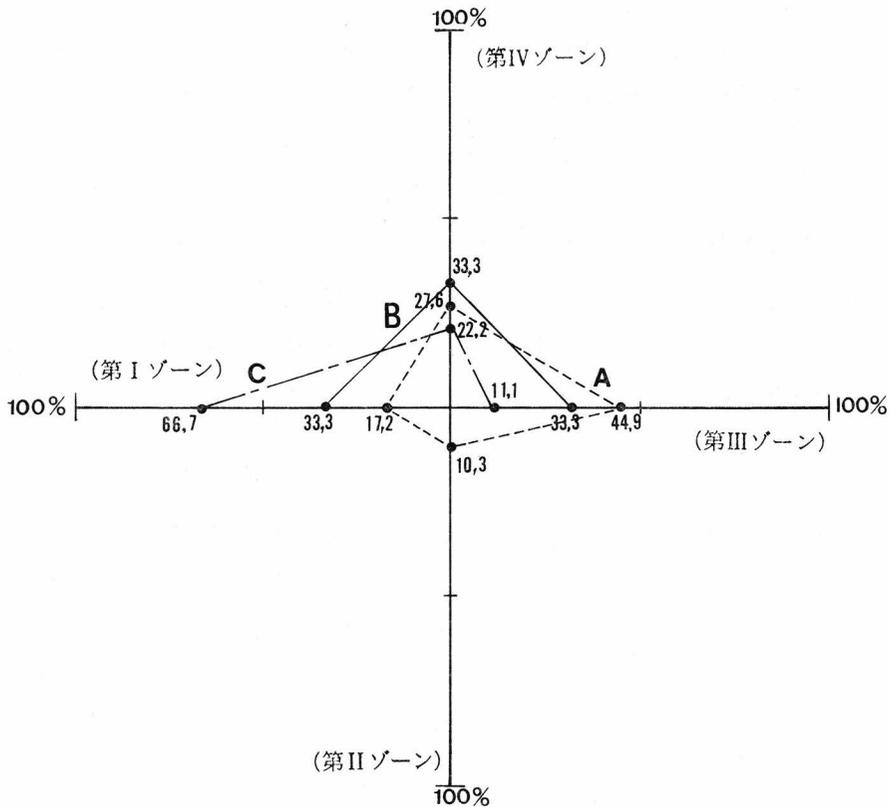
槌石は合計9点を数える。第IVゾーンに2点(22.2%)、第IIIゾーンに1点(11.1%)、第Iゾーンに6点(66.7%)の占有率である。第Iゾーンに7割近くの資料が分布する点は、ブロック中央部を主たる分布域としない敲石とは対照的である。

3. ま と め

以上のことから、植物質食糧の調理用具と想定した敲石は第IV・第IIIゾーンを、石器製



第6図 石器総数に対するゾーン別占有率と敲石類のゾーン別占有率(第2b層)
太線：敲石類，細線：石器総数



第7図 敲石・局部磨製礫・槌石のゾーン別占有率相関グラフ(第2b層)
 A(破線): 敲石, B(実線): 局部磨製礫, C(一点破線): 槌石

作具と想定した槌石は第IV・第Iゾーンを主な分布域としていることが明らかとなった。これは、全国の先土器時代遺跡から石器ブロックの範囲が明確な例を抽出し、敲石類それぞれの所属ゾーンを検討した結果^(注4)と同じ内容をもつものと言える。これは敲石と槌石の用途の違いを反映しているものとして積極的に評価してよいであろう。

敲石類を出土する先土器時代の遺跡は、以前に較べてその増加には著しいものがある。当然のことながら、敲石類の分布状況を観察し得る遺跡例も増えてきている。今後は石器ブロックはもちろんのこと、礫群・配石・土壇などの遺跡と敲石類がどのような分布状況にあるかについても意を注ぐ必要があるであろう。分布状況の結果を常に検証していくことは、今後とも等閑視し得ない重点課題である。

(黒坪一樹=当センター調査課調査員)

注1 山下秀樹・鈴木忠司・保坂康夫他『広野北遺跡』1985(京都)

注2 黒坪一樹『敲石類をめぐる分布論』1982(鈴木忠司編『野沢遺跡』所収, 京都)

- 注3 ゾーン区分の方法については、前掲書に記したとおりである。原文のまま引用しておく。
- 「まず、ブロックの最大範囲を囲み、次いで石器の最も多く密集している部分からブロック全体の中心点を選び出す。この中心点は、任意の1点の遺物で代表させるか、当該する遺物がない場合には、新たに適当な1点を設定し、それを中心点とする。その中心点を基準にして、それから最も遠距離に分布する遺物を第Ⅳゾーンから順に各ゾーンへ組み入れてゆく。ブロックには、中心点から極端に離れた位置に散在する遺物があるのが通例であるので、この非常に疎らに分布する資料を一旦切り離す意味で、まずブロック全体の資料数の内5%に相当する量の資料を、第Ⅳゾーン(ブロック外)に入るものとして取り出す。この作業で差し引かれた残余(95%)を100とし、第Ⅲゾーン(ブロック外縁部)はその10%、第Ⅱゾーン(ブロック中間部)はその30%、そして第Ⅰゾーン(ブロック中央部)は残り60%の資料で占めるものとする。したがって、石器総数と各ゾーンの占有する石器数の比率を示せば、第Ⅳゾーン5%、第Ⅲゾーン9.5%、第Ⅱゾーン28.5%、第Ⅰゾーン57%になる。」

謝辞

拙稿の執筆に当り、平安博物館の鈴木忠司氏、山下秀樹氏から全面的な協力を受けた。両氏からは敲石類の分析方法や着眼点について、常日頃から御教示を頂いている。しかしながら、筆者の力不足のために新たな作業に踏み出せず、今回は旧態依然としたレポートになってしまった。敲石類をめぐる分布論をさらに深化させる1つの踏み台として、また従来の着眼点の妥当性を再確認したことに今回の仕事の意義を見出したい。図面の調整では、石田雅晃(仏教大学学生)・上田真美(花園大学学生)の両君に御手数をおかけした。以上の方々に衷心より謝意を表する次第である。